

写真展「9人の写真家が見た水俣」

水俣病に長く係わりを持つ9人の写真家と遺族が一同に会し、「水俣・写真家の眼」プロジェクトを立ち上げました。60年にわたり撮影した、20万点を超えるカットの保存と活用を目的に、2022年5月に法人を設立しました。その出発点として熊本で、またその一部を東京で写真展を開催します。

<p>桑原史成(Shisei Kuwabara)</p>  <p>1936年、島根県津和野に生まれる。60年7月から水俣病の撮影を開始。郷里の笹ヶ谷銅山の砒素 鉱毒と重ね合わせた。主な撮影テーマは水俣病、筑豊炭田、激動の韓国、沖縄、ベトナム戦争、北朝鮮、アラスカ、カンボジア、旧ソビエト連邦の崩壊。</p>	<p>塩田武史(Takeshi Siota)</p>  <p>1945年、香川県高松市に生まれる。70年、水俣に移住。72年、第一回国連人間環境会議・ストックホルムを水俣病患者とともに訪問。75年、カナダの原住民居留地を水俣病患者とともに訪問・取材。85年、熊本に移住。2014年9月死去。</p>	<p>宮本成美(Shigemi Miyamoto)</p>  <p>1947年、京都に生まれる。70年、業界紙の仕事で、厚生省水俣病補償処理委員会への抗議の現場を取材したのが水俣病との出会い。以後、巡礼、一株運動、劇「苦界浄土」、自主交渉、砂田明、不知火海学術調査団、緒方正人、東京水俣展を取材・記録。</p>	<p>アイリーン・M・スミス(Aileen M Smith)</p>  <p>1971年から水俣病取材のため、水俣に3年間住む。75年写真集「MINAMATA」英語版をユージン・スミス氏と出版。現在、脱原発、日本の原子力政策、プルトニウム利用問題などに取り組む市民グループ「グリーンアクション」代表。京都在住。</p>
	<p>石川武志(Takeshi Ishikawa)</p>  <p>1950年、愛媛県に生まれる。71年、ユージン・スミス氏と出会う。アシスタントに勤められ、水俣の撮影を始める。78年アジアの祭りや民族を取材。82年、インドのトランスジェンダー社会「ヒジュラ」の取材を開始。2008年、水俣の取材を再開。</p>	<p>北岡秀郎(Hideo Kitaoka)</p>  <p>1943年、熊本県に生まれる。弁護士事務所の仕事を通じて水俣病原告の本人尋問に接し、記録の必要を感じ撮影を開始。2016年より「月間ミナマタ」の発行を開始。ハンセン病、川辺川ダム問題にも接し撮影、発信。現在は編集著述業。福岡県大牟田市に在住。</p>	<p>小柴一良(Kazuyoshi Koshiba)</p>  <p>1948年、大阪府に生まれる。72年、西川猛写真事務所に撮影助手として入所。土門拳氏の古寺巡礼1大和篇」「女人高野室生寺」などの撮影助手を務める。74年から水俣。出水の水俣病取材を開始。2018年、福島を取材・撮影した展覧会を開催。</p>
		<p>芥川 仁(Jin Akutagawa)</p>  <p>1947年、愛媛県に生まれる。夜間中学、三里塚闘争、土呂久鉱毒事件を取材。78年の水俣病事件の被害者と出会い、同年12月に水俣へ。約1年半の間、水俣病センター相思社の職員として患者の畑仕事などを手伝いつつ水俣病事件を取材。宮崎県在住。</p>	<p>田中史子(Fumiko Tanaka)</p>  <p>1941年、長野県に生まれる。87年に行われた大規模検診(1000人以上の水俣病患者が確認された)をきっかけに「患者が1000人いるなら100人は取材しよう」とにかく手足のしびれを握らなくては」と思い、同年から水俣での撮影を開始。</p>

丸の内フォトギャラリーへの地図

